

V. 派遣議員団としての所見

ODA調査第2班は、当初、平成22年12月5日から7日まで3日間の日程でハイチを訪問し、地震災害支援現場の視察と関係者との意見交換を行う予定となっており、出発の直前までハイチ入りの可否について、外務省本省及び在ハイチ日本大使館と協議を続けてきた。しかし、11月以降のコレラの感染拡大や治安状況の悪化等を考慮して、最終的には訪問を取りやめることとした。

このため今回のODA調査では、ドミニカ共和国及びエルサルバドルにおける我が国ODAの実施状況について視察及び意見交換を行うとともに、我が国のハイチ支援の現状について国連代表部及びAMD A（国際医療支援NGO）から意見を聴取することとした。また、JICA関係者（専門家、シニアボランティア、青年海外協力隊員）や国連邦人職員等からも様々な意見を聴取し、ODAの在り方について、多くの教訓と示唆を得ることができた。

今回の調査を通じて得た議員団の所見は、以下のとおりである。

1. 対ドミニカ共和国援助について

ドミニカ共和国は、安定した民主主義国家であること、カリブ地域の平和と安定に重要な地位を占めること、社会経済開発に前向きに取り組んでいること、日系移住者が伝統的に我が国との架け橋となってきた歴史があることから、同国と安定した協力関係を維持していくことは大変重要である。

ドミニカ共和国が一般プロジェクト無償資金協力の卒業国となる中で、同国へのODAは技術協力を中心とした支援にシフトしている。今回の視察と意見交換を通じて繰り返し指摘されたことは、我が国から派遣された日本人専門家やシニア海外ボランティア等に対する様々な感謝の意の表明であった。我が国の技術協力では、2008年までの累計で1,196名近くの日本人専門家、青年海外協力隊、シニア海外ボランティア等を派遣しており、現在74名のJICA関係者がドミニカ共和国各地で活動中である。こうした専門家等による技術指導によって、ドミニカ人の仕事の観点が変わり、企業家の思考を変え、その相乗効果が周りの人にも広がっているとされ、これは技術協力の大きな成果である。

また、2008年までの累計で1,421名を超える研修生をドミニカ共和国から受け入れ、帰国後は様々な分野で指導的な役割を担って活躍している。視察先においても本邦研修を受けた人は他のドミニカ人と明らかに考え方や仕事への取組姿勢に違いが見られることに感銘を受けた。ドミニカ共和国の開発課題である貧困削減、競争力向上、環境保全などの問題解決には人々の考え方を変えることが必要であり、その意味で本邦研修は今後も重視していくべきである。

一方で、マルティネス長官からは必要な分野への専門家等の派遣が依然不足していること、本邦研修を受けるドミニカ人を増員して欲しい旨の要請もあった。我が国の技術協力を中心とした「顔の見える援助」は同国内での評価が非常に高いことから今後も積極的に展開する必要があるが、同時に現下の厳しい財政状況の中で、費用対効果の面で優れている専門家等の派遣に必要な予算をいかに確保するかが今後の課題と言えよう。

このほか個別案件のうち、まず「ギド・ヒルデア学校教育施設拡充計画」と「メルセデス・デ・ヘスス基礎教育施設建設計画」は、草の根・人間の安全保障無償資金協力により、貧困地域における教育施設を建設したものであるが、比較的小規模なプロジェクト（約1千万円）でありながら、現地の切実なニーズに適切に対応したものであり、極めて有益な援助であった。また、「友好医療教育センター建設計画」は、一般無償資金協力により、病院内に医療教育・訓練センター建設と機材を整備するものであるが、これにより安価な料金で画像診断サービスが提供でき、貧しい人々も受診することが可能となった。最後に、「廃棄物総合管理能力強化プロジェクト」は、技術協力プロジェクトにより、モデル地区におけるゴミの減量化や住民意識の啓発を行うものであるが、プロジェクト実施によって、ゴミの排出に関する住民意識に一定の変化は見られるものの、ゴミの分別などリサイクルは今後の課題となっている。本プロジェクトを更に継続・強化することにより、廃棄物管理と環境教育の徹底を図っていくことが必要である。

2. 対エルサルバドル援助について

エルサルバドルは、中米5か国で最も国土面積が小さく人口密度が高いこと、天然資源に乏しいこと、地震・ハリケーン等の自然災害に脆弱であること、国民が勤勉であることなどから日本と類似しており、「中米の日本」とも呼ばれている。また、同国は激しい内戦を経験し、現在定着しつつある民主主義を確たるものにすべく努力していること、また、中米統合を積極的に推進しており、同国への支援は近隣の中米諸国を含む中南米地域の平和と安定に寄与することから、引き続き同国を積極的に支援していくことは極めて重要である。

現在、エルサルバドルへのODAは、開発の遅れている東部地域に対し重点的な援助を実施している。東部地域は、同国の最東端に位置し、内戦による被害を最も受け、開発から取り残された地域である。関係者との意見交換の中で、これまで東部地域には雇用がなく、若者は軍に入るか、不法滞在でアメリカに行くか、反政府勢力に入るかという選択肢しかなかったが、ラ・ウニオン港（円借款）と高等職業技術専門機構（MEGATEC）ラ・ウニオン校（建物は見返り資金）の支援案件によって、東部地域に雇用と産業が創出されたとの説明を受けた。

特にラ・ウニオン港は我が国の円借款により建設されたエルサルバドル史上最大の公共事業であり、ポスト・パナマックス船の寄港も可能な港湾施設である。開港に当たっては、エルサルバドル政府による運営方法決定の遅れがあったものの、本調査団が会談をしたスアレス農牧大臣の尽力もあり、2010年6月に開港した。同じく我が国の円借款で建設されたサンサルバドル国際空港と同様に、ラ・ウニオン港も将来における中米のハブ港になることが戦略的な目標として期待されている。我が国としても港湾機能が十分に発揮されるよう、引き続き技術支援等を行っていくことが求められている。

また、MEGATECラ・ウニオン校を通じた人材育成は、同国の生産性向上と雇用創出のために不可欠な役割を担っている。我が国としては、これらのプロジェクトを中核として、それがもたらす経済的・社会的効果を東部地域全体の活性化につなげていくための支援を今後も継続して行うことが必要である。

日・中米友好橋は、エルサルバドルとホンジュラス国境に新しい橋を架ける広域無償資金協力によって実現したものである。この橋は、ラ・ウニオン港開港に伴い、陸揚げした貨物を中米各地に運搬する陸上交通整備の一環として建設されたものであるが、東部地域のみならず中米全体の便益を意図していることから、その名前が付けられた。2009年5月に完成したものの、ホンジュラス政府による国境施設の建設遅延や同国におけるクーデターの発生により開通が遅れていたが、2010年11月末に開通した。視察当日においても、大型トラックやトレーラーなど、多くの車両がこの橋を往来している光景を目の当たりにした。ホンジュラス政府による本格的な国境施設の建設が今後の課題ではあるが、この橋がラ・ウニオン港開港と相まって、中米地域全体の経済発展につながることを強く期待するものである。

このほかJICA関係者との意見交換を通じて、シャーガス病対策の重要性を認識した。エルサルバドルの死亡原因の第1位は殺人などの治安関係であるが、第2位は心臓病である。シャーガス病は、吸血性のサシガメが媒介となった感染症であり、感染しても自覚症状がなく、長期間の慢性期を経て突然に心臓疾患や消化器系の機能不全を起こす病気である。慢性期に移行すると治療法がないが、感染者の90%が慢性患者となり、うち30%が心臓疾患になるとされる。このため殺虫剤散布による駆除や地域住民に対する予防啓蒙活動が何より重要となっている。シャーガス病の感染減少に向け、住民参加型の技術協力プロジェクトを今後も継続・強化していくことが必要である。

3. 対ハイチ援助について

ハイチは、カリブ諸国の中で我が国と最初に外交関係を樹立し、伝統的に友好関係を発展させてきた国である。2010年1月に首都ポルトープランス郊外約

15 キロで発生したマグニチュード 7.0 の地震によって、死者約 22 万 2,500 人、被災者約 370 万人（人口の 3 分の 1 以上）にも上る未曾有の被害が発生した。この地震による被害総額は約 78 億ドルであり、これはハイチの GDP（09 年）の約 1.2 倍に相当する規模である。我が国は、震災直後に国際緊急援助隊の医療チームを、2 月には国連ハイチ安定化ミッションに自衛隊を派遣したほか、3 月にニューヨークで行われた支援国会合において総額約 1 億ドルの支援を表明した。

国連を中心とした世界各国が復興に向けた支援を続けていた 10 月に、ハイチ北部においてコレラが発生し、現在（2011 年 1 月）まで死者約 4 千人、入院患者約 10 万人にも上り、被害は更に拡大しつつある状況にある。我が国はハイチ政府との協議を経て、10 月及び 11 月に、コレラ対策に必要な浄水器、簡易水槽、ポリタンクなど 1,500 万円相当の緊急援助物資を供与したが、国連のパン事務総長が今後感染者は 65 万人に達する可能性があるという警告しているように、国際社会による一層の緊急の医療支援が喫緊の課題となっている。

このような中で、国連代表部及びハイチ支援関係者（JICA、AMDA）との意見交換を通じて、ハイチ復興支援の課題が明らかとなった。地震とコレラによる被害がなぜここまで拡大したかと言えば、長年にわたる政情不安などによる貧困の深刻さが背景にある。ハイチは人口の約半数が 1 日 1 ドル以下で生活する西半球の最貧国であるが、粗悪な鉄筋やコンクリートが建物の倒壊を招き、これらが地震による被害（下肢切断等）を増幅させる要因となった。また、安全な飲み水の確保やトイレなどの公衆衛生インフラが極めて不十分であり、コレラの感染拡大を防ぐことができなかった。

このため、今後のハイチの復興支援に当たっては、短期的には、コレラの緊急医療支援として、コレラ治療の経験のある医師や看護師の増員、治療用の輸液や消毒薬などの医薬品の拡大、住民にコレラの知識を正しく伝達する公衆衛生の専門家の増員などが必要となっている。中長期的には、スラム街を中心としたトイレや住宅の建設、安全な水を確保するための深井戸の建設、結核やエイズを始めとした感染症対策が不可欠である。また、仕事の創出や人材育成など経済を底上げして貧困を削減するための支援も重要である。

その際、各国による援助が重複して真に必要な人々に援助の手が行き届かないことがないように国連によるモニタリングとコーディネートが必要である。一方、我が国のコレラ支援に当たっては、菅波 AMDA 代表からの指摘のように、患者を隔離して排泄物を適切に処理するため、WTO と共同して早急に CTC（コレラ・トリートメントセンター）を設置することを検討すべきである。併せて、モデル地区を作り、医療支援を通じた現地とのパートナーシップの育成、公衆衛生教育の普及や深井戸の建設、耐震性のある住宅建設など、包括的な支援を行うことが必要である。こうした包括的支援は、医療支援を中心とした欧米の支援とは異なるものであり、日本独自の支援としてその価値は非常に高く

なるものとする。政府による早急なる検討を強く求めたい。

4. 全般的所見

(1) 適切なるODA予算の確保

ODAは、軍事的な貢献ができない我が国にとって、国際社会における発言力を高める重要な外交ツールであるが、その予算は財政事情の悪化に伴い毎年削減され、平成23年度にはピーク時（9年度）の約半分の水準となっている。また、ODA実績額で見ると世界第5位、対GNI（国民総所得）比は0.18%とDAC諸国23か国中で下から3番目となっている。国連は対GNI比0.7%を先進各国の開発目標としているが、日本はこの目標から大きく乖離している現状にある。

国連代表部やJICA関係者との意見交換の場においても、国連の日本人幹部職員登用やJICAボランティア派遣等に影響が現れているとして、ODA削減に対する強い懸念の声が示された。

イギリスが2013年まで、ドイツ、フランス、イタリアが2015年までに0.7%の目標達成を表明している中で、厳しい財政事情を踏まえつつも、いかに適切なるODA予算を確保して、国際社会における日本のプレゼンスを高めていくことができるかが極めて重要な課題である。

(2) 援助を通じた人材育成の重要性

今回の視察と意見交換を通じて実感した課題の一つが技術協力を通じた人材育成の重要性である。技術協力は、途上国の人造りに貢献するため、我が国の技術や知見を相手国の技術者等に伝えることを目的として、専門家等の派遣や研修員の受入れ等の事業を行うものである。ODA予算が全体として削減される中で、この技術協力は「顔の見える援助」として中米・カリブ諸国においても大きな役割を果たしていることに強い感銘を覚えた。

援助は本来、援助国側の一方的なチャリティでは決して成功せず、援助国・被援助国相互の協力が不可欠である。技術協力を通じた人材育成は、被援助国側にパートナーを作り、一緒に問題を解決する方法を見つけ出していくものであり、環境保全を始めとした開発課題への対処として極めて効果が高い。今後とも人材育成を主眼とした「顔の見える援助」を積極的に推進すべきである。

(3) 対中米・カリブ地域援助の必要性

中米・カリブ地域は、1970年代後半から続いた中米紛争により、国土の荒廃と経済の破綻をもたらしたが、その後、1990年代に和平が進み、各国が民主化と経済改革に努力した結果、政治・経済は概ね安定化しつ

つある。この地域に共通する開発政策上の最重要課題は貧困削減であるが、小規模な国々が隣接する地域の特徴にかんがみ、環境問題や感染症対策など地球的規模の問題があるほか、近年、気候変動による自然災害が多発しており、防災能力向上に向けた取組も課題となっている。

中米・カリブ地域は、地理的にも遠く、アジアやアフリカと比べ我が国の関心が必ずしも高いわけではないが、日系人も多く親日的であり、小規模な援助であっても効果が出やすい地域でもある。これらの地域との関係を強化することは我が国の国益にとっても重要であることから、現地の実情に即したきめ細かな援助を引き続き行うことが必要である。